

Newsletter 38

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第38号/2021年5月15日発行

Contents

- 巻頭言 楽しい夢と試練のとき
- 特集Ⅰ 「基盤研究」「創造力とコミュニティ研究会」
- 特集Ⅱ 「選書刊行記念企画」「選書新刊紹介」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター設置科目】身体知・音楽／身体知・映像／アカデミック・スキルズ
- 特集Ⅳ 「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」「学習相談」
- 特集Ⅴ 「研究の現場から」
- 活動予定
- 私の〇〇自慢



アカデミック・スキルズ授業風景

楽しい夢と試練のとき

教養研究センター副所長
片山杜秀（法学部）
Morihide Katayama

夢野久作の『ドグラ・マグラ』は日本近代文学の傑作でしょう。主人公はアンポンタン・ポカン君。入院中の彼は、閉ざされた病棟の中で、脳は実は物事を考えるところではない、という想念に取り憑かれています。指を切って痛いと思う主体は指そのものではないか。腹が減って食べたいと願う主体は胃ではないか。いや、腸や食道かもしれない。喋りたいのはまず口であり、嗅ぎたいのはまず鼻であり、聴きたいのはまず耳ではないのか。とにかく人間とは、身体の各処がそれぞれに願って感じて考えて、それらが交響してひとつの全体をなす生き物である。そのようにポカン君は信じているのです。すると脳は何をしているのか。連絡や調整でしょう。ポカン君は頭でっかちが嫌いなのです。覆してたまらない。心とか精神とか呼ばれるものは脳に存在するかのようには思いたがるのが近代人の長年のさがで、電子頭脳で心を模倣する試みなどはそういうアイデアの極限でしょうが、ポカン君はそれを退ける。心や精神とは身体全部が交響しあっての物種だと主張してやみません。そして、このポカン君に、夢野久作は近代へ異議を申し立てる自らの思想を全面

的に託しているのでしょうか。教養研究センターに関わっていると、『ドグラ・マグラ』の世界をしょっちゅう思い出してしまうのです。ポカン君の説に従えば、心や精神をかたちづくる真の学びとは身体で知る学び以外にはないことになりますが、わがセンターの設置授業と言えば、「身体知」に「身体知・音楽」に「身体知・映像」と、まさに全身で行為することを求める講座のオン・パレード。大看板の「アカデミック・スキルズ」も、立って喋って動いて説得する、プレゼンテーション能力の取得に重きを置いています。受講者が全身全霊のパフォーマンスを披露してくれるとき、通称「アカスキ」の花が咲くのです。これはもうポカン君の理想の学苑なのか。そんな心持ちによく浸っておりました。ところが、世の中は甘くはなかった！2020年の疫病禍は、身体を交響させるライブの授業形態に大きな足枷をはめ、私共はヴァーチャルな二次元の世界への大幅な撤退を迫られました。センター設置授業の長所がかなり封じられたのです。さらに、2020年度で、センターの事業を推進するための主たる動力であり続けてきた、極東証券からの御寄付が終了することにもなりました。ただただ感謝と御礼の心しかないのですが、結果、2021年度には大事な授業が幾つも開かれなくなる事態が訪れています。全身全霊を傾けてこそぞ知！センターの掲げてきた旗を新時代にどのように立て直すか。正念場が訪れていると思っています。

基盤研究

文理接続プロジェクト 医学史と生命科学論

教養研究センターの基盤研究として位置付けられた「文理接続プロジェクト」は、2019年度に開始し、その年度は各学期に三回ずつ、計六回の講演会が企画されました。二年目の2020年度は、より連続性のある形を求めて、テーマを「感染」と統一し、月一回の少人数での研究会を企画して、活動内容をブログ (<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>) に記録しました。当初は春学期から対面で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催時期が大幅に遅れ、結局第一回研究会は秋学期に入ってから、Zoomで行われました。2020年10月から2021年3月まで、六回の研究会が開かれました。

毎回一名の話題提供者が一時間ほど話をして、その後一時間程度の自由な議論を行うという形です。以下が、各回の話題提供者とそのテーマです。第一回、大西和夫先生（国立感染症研究所免疫部客員研究員・免疫学）「感染症の基礎知識」。第二回、鈴木晃仁先生（経済学部・医学史）「Covid-19のパンデミーと食肉の問題」。第三回、見上公一先生（理工学部・科学技術社会論）「感染のリスクと科学技術」。第四回、小林徹先生（龍谷大学文学部・フランス

現代思想）「危機への備え：現代人類学と感染症」。第五回、井奥洪二先生（自然科学研究教育センター所長、経済学部、環境科学・医工学）「ワクチンなど最近の話題にみる文と理の接点」。第六回、小菅隼人先生（教養研究センター所長、理工学部、英文学・演劇学）「総合討論：文理接続プロジェクトの意義と方向性について」。

半年間、月に一回、金曜日の夕方に二時間強、平均すると毎回8～9名の参加者による、非常に刺激的な考察と議論が行われました。最終回では、今後の方向性について検討しました。文理の「融合ではなく接続」というコンセプトで何ができるのか、何をどのように目指すべきなのか、参加者にとって最も有益な形はどのようなものなのか、等々、研究会の意義を考えること自体が、文理接続の意義と可能性を考えることにもなります。この半年間の最大の成果は、この試みに関心を持って定期的に参加してくれるメンバーが増えてきたことです。2021年度は、この輪をより豊かなものに育て、研究会としての質を高めていくことができると思っています。

（荒金直人）

※所属・職位は開催当時のもの

「創造力とコミュニティ」研究会

研究会立ち上げ3年目となる2020年は、新型コロナウイルス感染症のために、予定していたシンポジウムは延期となりました。しかし、パンデミックの時代だからこそ、創造力とコミュニティの意味することを語り合う必要があるだろうとの思いから、秋より感染対策を十分に行って、火曜日に開催している居場所「カドベヤ」を会場として、人数制限を行ったうえで対面の研究会を開催することにしました。メインテーマを「パンデミックの中での個人とコミュニティ」として、アーティストやコミュニティ主催に関わる方々を招いて、計4回の研究会を開催しました。開催内容は以下の通りです。

2020年10月20日 第9回 「宗教とコロナウイルス」

講師：瀬野美佐（仏教徒・作家）

新型コロナウイルス感染症が広がる中でコミュニティの取り組みについてお話を伺い、参加者とのディスカッションを行いました。

2020年11月17日 第10回 「コロナウイルスと文化支援」

講師：厚地美香子（認定NPO法人あっちこっち代表）

若狭英雄（チェンバロ奏者）

各国・各文化の文化支援の在り方を我が国の現状と比較

するとともにコミュニティに根差すアーティストたちの努力について、関係NPOの代表者とアーティストにお話を伺いました。

2020年12月1日 第11回 「パンデミックの中で自分自身に向き合う」

講師：手塚千鶴子（慶應義塾大学元教授）

身体的距離により他者との触れ合いが制限され私たちはどのように個人として向き合えばよいのでしょうか。異文化コミュニケーションの専門家である手塚千鶴子氏にお話を伺いました。

2021年3月16日 第12回 「パンデミック時代の新たな『公共』アート」

講師：横山千晶（慶應義塾大学法学部教授）

パンデミックは世界の人々を共通の思いでつなぐ芸術の可能性を開くことになりました。パンデミック時代の新たな公共のアートの在り方と可能性を参加者とともに探りました。

いずれも活発な議論が展開され、ポストコロナ時代への展望を探るきっかけとなりました。（横山千晶）

<選書刊行記念企画>著者と読む教養研究センター選書

第1回「理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ」

選書広報の一策として始まった本企画初回では、最新刊の著者・石川学氏、荒金直人氏および渡名喜庸哲氏が登壇し、各自からのコメントやそれへの応答、参加者も交えた質疑応答が行われました。対面・オンライン混合形式で実施され対面式には23名、オンライン方式には60名が参加しました。オンライン形式を取り入れたのは入場者数に制限があったからですが、塾外からの参加者がいたり動画配信が好評を博したりという(*)、予想外の成果がもたらされました。

最も予想が外れたのは学生の参加が多かったことです。テーマが厳かなので教員の参加が多いと見込んでいましたが、受付開始直後から続々と学生の申込がありました。リアルタイムで参加できない学生からは早々と動画配信の要望がありました。当日の会場では、熱心にノートを取ったり鋭い質問をしたりする彼らの向学心に圧倒されました。

また本企画は、学生と研究者が1冊の書物について

言葉を駆使して議論を尽くす共通の場を作ることも意図していました。バタイユ理解を促すための解説やコメントから始まり質疑応答では高いレベルの議論が展開されて学生は大いなる知的刺激にさらされるという目論見は、事後アンケートを読む限り達成されたと思います。大学生生活に多くの制約をかけられた彼らが真剣な対話を渴望していたことがありありと感じ取れました。

最後に挙げたいのは、本企画がセンター所員と事務局の協働によって実現したことです。オンライン形式採用にあたり解決すべきことは多かったのですが、共に知恵を絞って無事に終えることができました。そのすべては報われて余りあると、未だ鮮やかなあの日の記憶を反芻する度に思います。

(*)：当初は11月25日から17日間の予定で開始したが、好評のため2020年度末まで期間を延長し、最終的に延べ280名が閲覧した。

(瀧本佳容子)

教養研究センター選書21

『コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力』

ずうずうしくも選書として出版させていただくのが2冊目となります。2020年は教養研究センターの地域連携事業として開始した居場所「カドバヤで過ごす火曜日」の開設10周年に当たり、2018年から始まった「創造力とコミュニティ研究会」も3年目を迎えておりましたので、今までの成果をまとめて発信し、センターへの感謝を表明したいという気持ちから、選書の応募に手を上げさせていただきました。ところが襲ったのは新型コロナウイルス感染症です。おかげで居場所の運営もままならず、「創造力とコミュニティ研究会」を基盤として予定していたシンポジウムも開催できなくなりました。しかし、そのような「ままならない」状況の中で、あらためてコミュニティとは何か、芸術は私たちが生きていくうえでどのような意味を持つのか、パンデミックの中で人々はどうのような創造力を発揮して互いを支え合っているのか、について記録し、課題として考えることができました。この本がポスト・コロナウイルスのコミュニティと芸術を想像・創造するきっかけとなれば幸いです。

(横山千晶)

《2021年度教養研究センター選書 原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。

この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応募資格 教養研究センター所員(共同執筆も可)
■内容 研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■事前申込締切日：8月30日(月)

■原稿提出締切日：9月30日(木)

●詳細は別途所員宛にご案内しました募集要項をご確認ください。



身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、株式会社白寿生科学研究所からの寄付による寄附講座として2つの授業が開講されました。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」でした。しかしながら2020年度においては、新型コロナウイルスの感染拡大防止の措置のため、従来とはまったく異なる内容となりました。器楽の授業は、春学期は完全オンラインとなり、対面は秋学期からとなりました。声楽クラスは、春学期は休講となり、秋学期のみ、対面で授業をおこないました。感染症拡大防止の対策を義塾と検討し、対面での授業の再開の許可を得てからとなりましたが、授業に参加した学生たちは、十分に注意しながらも、充実した時間を過ごすことができました。成果発表演奏会は、入場者制限を行いながら、12月19日（器楽）および22日（声楽）に、藤原洋記念ホールにて催しました。なお、演奏会の模様は、YouTubeでライブ配信いたしました。

（石井明）

身体知・映像

新型コロナウイルス感染症の影響で前期は休講とせざるを得なくなりました。その後極東証券株式会社の寄付終了に伴い、本講座も来年度は閉講と夏に決まった時点で、講師一同、秋学期の開講を決めました。今年は秋学期のみで撮影の技術を学び、脚本を書いてオリジナル作品を作るという欲張った計画ですすめました。コマ数が例年より少ない中で作品を制作することは学生たちにとって非常に大変な作業だったと思います。しかし出来上がった二つの作品、「しょうこ」と「みき」はグループワークの中での議論と協力のたまものとして、見ごたえのあるものとなりました。2月6日の作品上映会では外部からの参加学生も迎えて、苦労話も含めて様々な意見交換がなされました。そして本年度も山田健人監督と坂倉杏介先生のお二人を講師に迎えて学生たちを支えることができたことに感謝しています。このクラスの受講者から次世代の映像作家や脚本家が生まれることを固く信じています。

（横山千晶）

アカデミック・スキルズ （火曜英語クラス）

この授業では、何か特定の事柄について情報を集め、理解し、自分の考えをまとめた上で他者に伝えるという一連のプロセスを追いました。論理的な思考の結果を学術的に適切な形で表現することは、学生がぶつかる大きな壁の一つです。ましてやそれを母語ではない英語で行うとなると、適切に伝わるように単語の選択から文や段落の構成まで多くのことに注意を払う必要が出てきます。本来であれば一年間を通じて、少しずつ段階を踏みながらそのことを学んでいくはずでしたが、今年はそれを秋学期のみで行わなくてはいけない状況になりました。一緒に学ぶ学生との交流の機会も少ない中で、履修した学生が高いモチベーションを持って取り組んでくれた結果、提出された論文はどれも質の高いものに仕上がったと思います。今回の経験が何かしらの形で今後の活躍に繋がってくれることを期待しています。

（見上公一）

アカデミック・スキルズ （木曜クラス）

秋学期のみでしたが、例年通りの授業内容、進行、課題の維持に努め、自由テーマで8,000字の論文完成を目指しました。授業形態は対面6回、Zoomによるライブ6回、図書館提供の情報検索セミナーは、宿題としてオンデマンド版を受講してもらいました。完走11名に対し教員は3名、TAも2名で、大学院での授業やオックスフォードのチュートリアルといった雰囲気がありました。

様々な制約のなか、学生たちはよく頑張り、高いレベルで結果を出してくれました。「この回、この演習は本当に必要なのか?」、「半年だけ!短期集中講座!のように受講のハードルを低くして、今後はより多くの1-2年生に履修してもらった方がよいのでは?」、「達成度の差や欠席、脱落率が通年でも半年でもあまり変わらないのは、授業デザイン上の欠陥があるということでは?」等々、様々なことを考えさせられました。

（小林拓也）

教養研究センター設置科目



春学期に開けなかった、あるいは不十分なかたちで行えなかった授業を、いかに建て直し、学びの成果に結びつけるか。教員はそのために試行錯誤しました。けれど、困難な状況だからこそ、受講者に漲った意欲の高まりに乗せられ、助けられて、どの授業も終わってみれば例年以上の実りを得ていた。そんな稀有の学期だったかと思えます。

「アカデミック・スキルズ」は通年で行われてきました。しかし、2020年度は春学期の開講を断念し、秋学期のみとなって、当然、授業回数は例年の半分となりました。さらに付け加えると、普段なら、受講希望者から意欲の高い学生を理由書等に基づいて選抜する段階を経ていましたが、2020年度は、大学の方針に従い、すべて抽選となったのです。果たしてそれで、論文執筆やプレゼンテーションの準備に膨大な時間をとられる高負担の大授業に耐えてくれる履修者が揃うのか。そんな不安が、教員の側になかったとはいえません。しかし、杞憂でした。履修者の意欲は例年以上に高く、半期だというのに、通年で行ったときに優るとも劣らない水準の論文やプレゼンテーションの成果が、数多く生み出されたのです。そのことは、論文部門とプレゼンテーション部門の両コンペティションの内容からも明らかと思えます。能力的選抜による2019年度までと自動的抽選による2020年度の履修者のあいだに、学習意欲や能力の差がさほど認められなかったとすれば、それは学生全般のレベルがそもそも高いことを意味し、半期でも大きな学習成果があったとすれば、通年でなくとも「アカデミック・スキルズ」を開きうるとの証明を得たことにもなるのではないのでしょうか。様々な示唆を得た秋学期でした。



アカデミック・スキルズ（金曜クラス）

金曜クラスは教員3名、学生は最終的に16名が参加しました。Zoomによるライブ授業、それ以外のやり取りはSlack等を用い、プレゼンテーションもZoomまたは動画作成という形を取りました。例年以上に孤独な作業が増えてしまうことに不安もありましたが、幸い一人一人がしっかり問題意識を持って参加してくれ、カメラ越しでも対面に劣らない積極的な意見交換ができました。授業外の論文指導や学生同士のコメントも、ことによれば例年以上にインテンシヴに行われたのではないかと思います。プレゼンも比較的慣れている学生が多い印象でした。半年の間各自のテーマについてじっくり話し、濃密な時間を過ごした学生たちと一度も直接顔を合わせられなかったのは残念ですが、厳しい1年を乗り越えた彼らにとって、この授業が今後の大学生活のために意義ある経験となることを願っています。

（杉山有紀子）

学びのスキル 今後も探究

アカデミック・スキルズでは、独自性・公共性などの論文の性質や、脚注の使い方・参考文献の並べ方などの正しい書式を学ぶことができました。それらをすぐに実践できる場があったため、より深い学びとなりました。今後も、自分の論文テーマに関心をもち続け、さらに探究したいです。また、授業を通じて身につけた問題設定力や、批判的思考は、今後の学問だけでなく、社会人になってからも有効なスキルだと感じています。

知的探究心の豊富な学生の皆さんと議論を交わしたり、テーマ設定から論文完成まで、教授陣から丁寧なフィードバックをいただいたりしながら、論理的に思考した経験は、私にとってかけがえのない時間となりました。心より感謝申し上げます。

（法学部2年 塚原千智）

※学年は2020年度のもの

コンペティション入賞者一覧

■論文部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	木	法・2	塚原 千智	タレントの自殺報道による自殺誘発と予防——日本国内の新聞分析を通じて——
銀	英語	法・1	福川 莉乃	The Danger of Nationalism - "Personal Nationalism" in the United States
審査員特別奨励賞	英語	医・1	難波 美羅	How Can We Support Physicians through Education?
審査員特別奨励賞	水	法・2	高島 朝海	トランスジェンダーのトイレ利用に関する問題—及び性的指向・性自認に基づく差別禁止に向けた法整備への展望—

■プレゼンテーション部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	木	法・2	吉村 まほ	N 高等学校と伊計島の未来
銀	木	商・2	猶原 由梨	女性による女性運動から分析する日韓女性アイドルグループ
銅	水	法・2	高島 朝海	トランスジェンダーのトイレ利用に関する問題

「共に学ぶ」意義

コロナ禍でオンライン授業が多い中、本授業を通じて他者と共に学ぶ意義を改めて実感しました。アカデミック・スキルズでの論文作成やプレゼンテーション作りの過程において、行き詰まるが多々ありました。特に、コンペティションに向けたプレゼンテーションの構成が定まらず、心が折れそうな時もありました。その際、先生方やTAの皆様から頂いた沢山のアドバイスにより、自分の足りない部分に気づくことが出来ました。また、履修者の皆さんが論文完成に向け努力し続ける姿から刺激をもらい、私も納得がいくまで妥協せずに取り組むことが出来ました。

論文作成のための知識に留まらず、様々な分野への興味や学びに対する志など、皆様と共に学んで得られたもの全てが私の財産です。改めて感謝申し上げます。

（法学部2年 吉村まほ）

※学年は2020年度のもの

日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画

笠井勲舞踏公演「日本国憲法を踊る」(無観客収録配信)

毎年恒例となった新入生歓迎舞踏公演は、憲法改正が2020年度に話題になるだろうと予想しましたので、舞踏家笠井勲氏に『日本国憲法を踊る』を踊ってくださるよう、新型コロナウイルス感染症流行前をお願いしていました。2013年度の芸術選奨文部科学大臣賞を受けられた名作です。しかし、2020年4月7日より慶應義塾の全キャンパスがロックダウンされ、学内の全てのイベントは変更が余儀なくされました。そこで、この舞踏公演を中止にするか、オンライン開催とするかの選択を迫られることになりました。仮に無観客で収録・配信した場合、それが果たして舞踏という芸術形態にとって、そして、学生にとっても舞踏家にとっても意味があることなのか？ そうまでしても開催する意義はどこにあるのか？ その迷いを、舞踏装置をお願いした曾我傑さんに問いかけたところ、「笠井さんは目の前の観客に向かって踊っているのではなく、世界に向けて踊っているのだから」と指摘され、即座に決意が固まりました。そして、この新型コロナウイルス感染症の流行という特異な状況にあって目の前に観客がいなくとも何かに向かって踊る舞踏家の姿を記録しておくこともまた意義あることだと確信しました。10月28日に収録をし、併せて対談映像も公開しましたが、笠井勲の踊りと言葉によって、日本国憲法の美しい条文が無人の観客席に響かされる凄まじい体験を共有させてもらいました。そして、このコロナ禍は、演劇にとっても大学教育にとっても、その在り方を考える上で大きなチャンスだと気づかされました。その意味でも、今回の収録配信は意義のあるものになったと思います。是非、皆様の視聴をお願いいたします。動画配信URL：<https://youtu.be/INQEHKsxt0>



Kasai Akira Butoh Performance

日本国憲法を踊る

ライブラリーコンサート2020

日吉メディアセンターでは、HAPP企画として、2016年度から毎年ライブラリーコンサートを開催しています。塾生にとって日常的な場所である図書館の中で、プロの生演奏という非日常を体験してもらうことで、芸術に触れるきっかけを提供するとともに、図書館への親しみを感じてもらいたいということを目的としています。

2020年度はコロナ禍の影響を受けましたが、春から秋に日程を変更し、10月21日に弦楽四重奏、10月23日にジャズのコンサートを開催しました。感染防止の観点から観客席は設けられない形で行いましたが、館内の色々な場所から最後まで熱心に聴き入る塾生が多く見られました。また、YouTubeでのライブ配信も行ったところ、常時40～60名の視聴があり、来館できない人にとっても、気軽にコンサートを楽しめる機会を提供できたのではないかと考えています。(日吉メディアセンター 今井星香)

響きつづける「声」のものがたり—いしいしんじと聴く『義経千本桜』『源氏物語』

古典2作を現代語に訳した作家いしいしんじ氏と『三田文學』編集主任で作家の岡英里奈氏を講師に、古典の現代語訳から生まれる新しい言語表現について考えるため、三田文学会の協力を得てZoom上で実施されました。まず、いしい氏が『義経千本桜』を読みつつ紙人形劇を行い、岡氏が『げんじものがたり』を朗読して(ともにいしい訳)、いしい氏がどんな感覚や思考でもって昔のものがたりを今のことばに移したかについて対話が展開されました。その後、ものがたりの本質や書くことや読むことについて、参加者からの質問にも応えつつ対話が続きしました。オンラインでは視野が限定されるだけに発話者の声や表情に集中しやすい凝縮された空間が実現しました。また、自宅である京町屋の建具や窓外の風景を背に京都でもものがたりを書くことについて語るいしい氏の声は深みを増しました。さらに、国外からも参加申込があるなど、オンライン方式の特性が生きた企画となりました。(2021年『三田文學』春季号に本企画の報告が掲載されました。)



(瀧本佳容子)

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員(ピア・メンター)として、日吉メディアセンターで、学習に関するさまざまな相談を受け付けています。

コロナ禍における「半学半教」

2020年度の学習相談は秋学期からの開始となり、相談者数も少ないものとなりました。そのような中でも相談に来てくださった方は、オンライン授業で課題が増えたこともあり、レポートの書き方に関する相談が多かったように思います。また、キャンパスに来るのが難しい学生に向けて、オンラインでも相談を受け付けました。慶應義塾の理念に「半学半教」がありますが、2020年度は対面授業の減少から、そのような機会の多くが失われてしまったと思います。学習相談は、同じ学生としての立場から、今まで学んできたことを学生に還元する場であり、まさに貴重な「半学半教」の場です。学生同士が教え、学び合える学習相談を、来年度以降もぜひ活用していただきたいと思います。(文学部2年 越後くるみ) ※学年は2020年度のもの

研究の現場から

第28回「ミシェル・セールの初期思想—複数の結び目を作る」

フランスの現代思想家ミシェル・セール（1930–2019）は科学から芸術、そして技術革新に伴い変化し続ける今日の社会状況に至るまで、多領域にわたる膨大な著書を著しました。今回の発表では、その思索を通底している主題の一つについて『コミュニケーション』をはじめとする初期の論考を通じて検討しました。セールの試みとは、一つの学問域を複数の理論的な枠組みの結節点として捉え直し、重層的な知のネットワークの結び目として読み取り、またその結び目を複数化することだといえます。そしてそれは、諸学問領域に超越した、外在的な立場からではなく、あくまで領域に内在した立場から目指されたものでした。セールのこの試みがフランス思想の流れの中にどのように位置付けられ、また、今日どのような意義を持つのかについて、ご参加下さった先生方のご意見を伺うことができ、勉強になることばかりでございました。貴重な機会をいただき、改めて御礼申し上げます。

[2020年11月18日（水）Zoom開催]（縣由衣子）

第30回「知覚的補完：錯聴と空耳の科学—騙される脳—」

知覚的補完とは、人間の脳が、物理的に存在しない情報や、劣化した情報を、知覚上で補って理解することを指します。日常会話に目を向けると、人間は、人の声を理解する際に、様々な場面で「知覚的補完」をしていると考えられます。例えば、駅のホームでのアナウンスは、スピーカーの不具合から、音声途切れ途切れになったり、音声の一部が劣化・反響したりして、聞き取りづらいことも多いですが、人は多くの場合、音声を理解することが出来ます。また、一般に、人の声は、話者によって音響的な構造が異なり、発音の仕方でも人それぞれですが、その多種多様な音声を理解することが出来ます。知覚的補完の研究は1970年代から、言語学・心理学・生理学・脳科学・理工学分野で研究されていますが、そのメカニズムは完全にはわかっていません。今回の「研究の現場」では、知覚的補完に関する実験結果を発表させて頂き、参加して下さった先生方から大変貴重なフィードバックを頂きました。このような機会を下さり、ありがとうございました。

[2020年12月23日（水）Zoom開催]（石田真子）

第29回「英国唯美主義と好奇心」

研究の現場ではよく「好奇心（curiosity）」の大切さが唱えられますが、そもそも好奇心なるものは人類の知の歴史においていかなる役割を担ってきたのでしょうか。本発表ではまず、プラトンの描くソクラテスの世界から、聖アウグスティヌス以降の中世を通じて長らくネガティブに描かれてきた好奇心が、初期近代（ルネサンス）以降にその地位を徐々に向上させていく過程を精神的に考察しました。その後は私の専門である近代イギリス文学・文化史の観点から、特にウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドら19世紀後半の英国唯美主義の担い手達が、好奇心という言葉や概念を自らの芸術批評や創作といかに分かち難く結び合わせ、芸術の称揚によるコスモポリタニズムの可能性を見出していったのかを明らかにしました。オンライン開催となった当日は学部横断的に様々な専門の方々にご参加いただき、質疑応答もあわせ素晴らしい夕べとなりました。心より御礼申し上げます。

[2020年12月9日（水）Zoom開催]（石川大智）

予告 第31回 研究の現場から

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、思うままに意見を交わして参加者と語り合う催しです。

慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所です。

また情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。

■予定：7月14日（水）18：15～ Zoom開催

■講師：ピーター・バナード（文学部）

専門領域：日本近代文学、比較文学、幻想文学、ゴシック論

■演題：未定

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

（高橋宣也）

【情報の教養学】第1回：伊藤公平
AIと量子コンピュータと普通の塾生生活
日程未定

【HAPP】義太夫節をひもとく
—はじめての女流義太夫
6月7日（月）18：30～20：00、来往舎 イベントテラス
（オンライン配信予定）

【HAPP】「教養の一貫教育2021 Vol.1：吉増剛造×
空間現代 詩と音楽の交差するところ」(仮)
9月22日（水）15：15～18：00、高等学校 日吉協育ホール
（収録予定）

【HAPP】新入生歓迎行事 笠井叡舞踏公演（仮）
秋学期予定（ライブ配信、収録配信予定）、来往舎 イベントテラス

【HAPP】平家納経の世界
5月8日（土）14：00～、22日（土）14：00～
オンライン開催

【学会・ワークショップ等開催支援】
日本近世文学会2021年度春季大会
6月12日（土）～13日（日）、オンライン開催

【HAPP】ライブラリーコンサート2021
10月頃（未定）、日吉図書館 1Fラウンジ

【HAPP】日吉音楽祭2021
10月3日（日）14時開演、11月14日（日）14時開演
協生館・藤原洋記念ホール

※活動予定は中止・延期となる可能性があります。

庄内セミナー特別講話（動画）を公開しました！

2020年度の庄内セミナーは、新型コロナウイルス感染状況を鑑み、現地での活動は見送りましたが、庄内で活躍されている方から特別にご講演をいただきました。ぜひ、動画をご視聴ください。



1. 庄内の風土—近代黎明期を拓いた女たち—
講師：東山 昭子氏（郷土文学研究家）
動画URL：<https://www.youtube.com/watch?v=5N30JrYvO40>
2. 地方で生きるということ
講師：酒井 忠久氏（旧庄内藩主酒井家18代当主）
動画URL：https://www.youtube.com/watch?v=boYbCM1ES_M
3. シルクを通して考える過去、現在、未来
講師：大和 匡輔氏（鶴岡シルク株式会社代表取締役）
動画URL：https://www.youtube.com/watch?v=bNXyH9D_-nQ

私のお茶の時間自慢

なめらかな透明のガラス越しに、ふわりと葉が広がりゆくのを眺める。平らで丸く、理科の実験で使うシャーレの様なポットの蓋を開けて、立ち昇る蒸気の芳香を纏いながら、葉や花びら、種子が息を吹き返し、熱いお湯の中でその身体を伸ばし、膨らませる姿を覗く——新鮮なハーブが市場で手に入った時や庭で豊作になる季節は、このイエナグラスのティーポットを使います。ドイツの造形学校パウハウスの精神を受け継いだシンプルだからこそ豊かさを内包できるデザイン。学生時代にお手伝いをしていた造形作家の福澤エミさんから譲り受けました。作品の色塗りや事務手続き、バグ犬と遊ぶ……等、不思議な「書生」仕事の合間の小休止、日本家屋の縁側でのお茶の時間が私の楽しみでした。庭のレモングラスをささっと刈り取り、ポットに入れてハーブティーを出してくださる様子が本当に素敵で、ガラスの向こうでたゆたう鮮やかな緑の葉の美しさと、爽やかな香り、お喋りの声と共に懐かしく思い出されます。どうしても同じイエナグラスでカップも揃えたいと言い続けていたところ、数年前の誕生日に姉がプレゼントしてくれました。アップルミント、レモンバーム、ローズマリーにフェネル……。このポットとカップを囲むお茶の時間が、これからも益々豊かに積み重なってゆきますように。（大澤綾）



※教養セ卒業記念のため、二度目の本コーナー登場となりましたこと、何卒お許しください。皆さま、四年間大変お世話になりました。